

所報

No.130
令和2年2月17日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)
URL:http://center.tym.ed.jp/

目 次

- 巻頭言 1
- 各部研修の紹介 1
- 調査研究事業の概要 2～3
- センター事業より 3～4
- 随想 5
- 連載「知って得2019」 6

巻頭言

人 間 力

副所長 野口 安嗣



今から7～8年前になりますが、縁あって東京大学の卒業式に出席したときのことです。安田講堂での式の後、経済学部での授与式で学部長が述べた祝辞の一節、「これから社会に羽ばたく君たちにとって、一番大切なのは人間力である」という言葉がいまだに印象に残っています。

人間力とは、内閣府人間力戦略研究会が平成15年(2003)に、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力と定義したい」と位置付けています。

昨年3月に富山県高等学校生徒海外派遣事業で、各校から推薦された生徒を引率してベトナム・台湾を訪問してきました。実際に現地の空気にふれ、同世代の高校生との交流は、生徒たちにとってとても刺激的で、かけがえのない時間であったことが帰国報告書からも伺えました。また、今年度も富山大学で教職を志す学生に対し「富山学」の講義を行いました。立山曼荼羅を通して「立山の歴史と文化」を講義し、本物に出会い本物を見る目を

4年間で磨き教員の道を目指して欲しいと話しました。学生生活のさまざまな場面での経験の積み重ねが、人間力を育てていくのではないでしょう。

教育現場では、児童生徒や保護者との関係に悩む先生方を見かけます。総合教育センターでは、先生方の研修の一環としてカウンセリング講座を今年度は5回実施しました。私も機会をみつけては研修を聴講しましたが、カウンセリングの理論や技術を勉強しても、センターに訪れる相談者が心を開くのは教育相談部の研究主事であり、私ではありません。もちろん知識や理論は大事ですが、これを活かしながら相談者との信頼関係の構築をはかることこそが、教師の人間力だと感じました。当センター館野客員研究主事曰く、「最後は人だよ」なのです。

今後とも総合教育センターの研修事業が、児童生徒の人間力の育成にかかわり、彼らの成長過程に寄り添う教師の人間力を高める一助となるよう取り組んでいきたいと思えます。

教育研修部

科学情報部

教育相談部



新規採用教職員研修会(幼稚園教諭)
協議「幼児の姿に学ぶ援助の在り方」
(10月29日)



若手教員研修(初任者研修会)(小学校)
「授業におけるICT活用」
(10月10日)



第3回適応指導教室担当者研修会
「事例をもとに児童生徒理解を深める」
(1月17日)

2019年度 調査研究事業の概要



教育研修部

「主体的・対話的で深い学び」の充実を図る指導に関する調査研究(2年次)

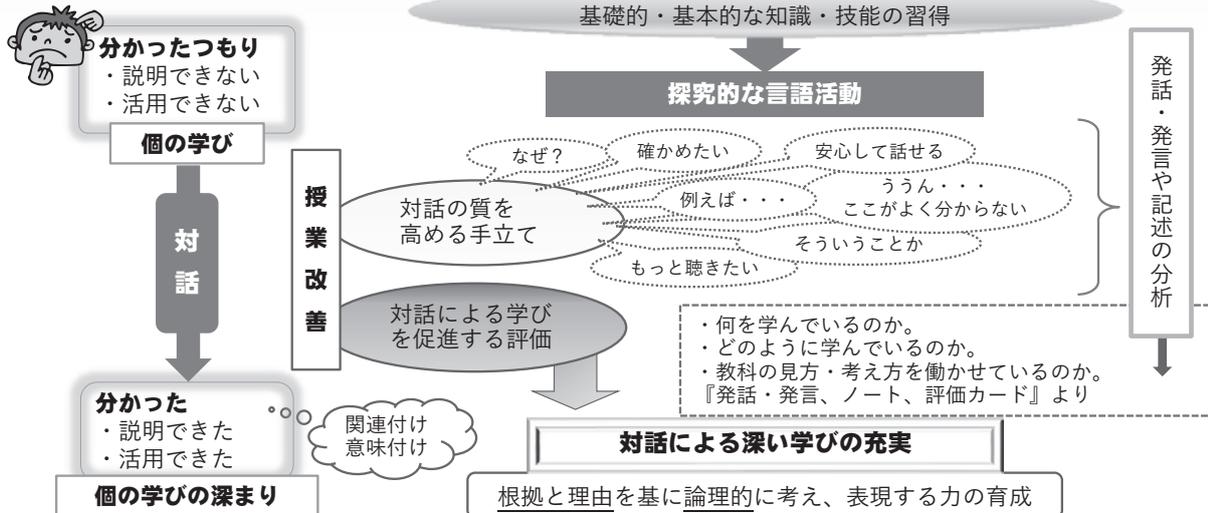
— 対話による探究的な言語活動の視点から —

昨年度から「対話による探究的な言語活動を取り入れることで、個の学びが深まる」と仮説を立て、ペアやグループ等の少人数での対話に焦点を当て「深い学びの充実」を目指し、調査研究を進めています。

1年次は、「教師の問いや言葉がけ」「評価カードによる対話スキルの育成」等の手立てを工夫し、「対話」を「互いの話を聴き合う場」にするための環境づくりに取り組みました。

2年次となる今年度は、「対話の質を高める手立て」「対話による学びを促進する評価」の2つの視点を基に、授業改善を進めました。

「対話の場を設定するタイミング」「子供同士の問いを生み出す手立て」「対話スキルを教科のねらいに結び付ける振り返り」等を工夫した授業改善が、個の学びの深まりに有効であることを、子供の発話・発言・記述等を基に紹介します。



科学情報部

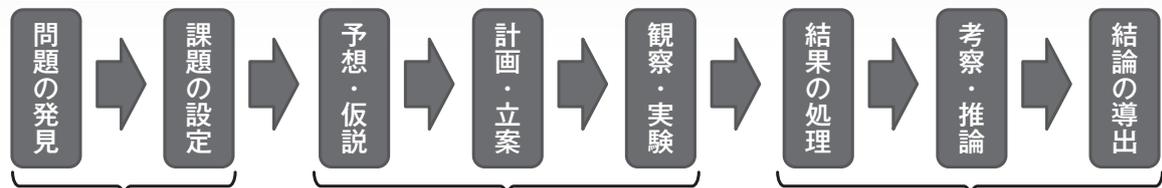
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習の在り方に関する調査研究(2年次)

— 観察・実験を取り入れた課題解決型学習を通して —

1年次の研究では、観察・実験を含む課題解決型学習の授業観察から、「課題解決型学習を効果的に実施するための要件」を作成し、これを基に学習計画を作成・実践することで、「主体的・対話的で深い学び」の促進につながることを明らかにしました。

2年次の研究は「要件」をより分かりやすく、より使いやすいものにするための研究開発を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた具体的な手立てとその効果について調査しました。また、「要件」を取り入れて学習計画を作成・実践するための「活用ツール」の紹介や「活用ツール」を用いた授業実践、校内研修の紹介も行います。

課題解決型学習の流れ



課題の把握

課題の追究

課題の解決

「主体的・対話的で深い学び」へとつなげる具体的な手立て

「活用ツール」を用いる

センター + 研究協力校(小学校)

観察・実験を通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための手立てを取り入れた授業実践

・授業実践で取り入れた手立てとその効果 ・活用ツールを利用した学習計画の作成・実践

♡ 教育相談部

児童生徒の自己適応感を促す 心理教育プログラムに関する調査研究

— あるがままの自分を感じるための学習プログラムの開発 —



児童生徒を取りまく環境は、社会の急激な変化によって一層多様化、複雑化しています。児童生徒がその環境に適応することにとらわれ、自分の感情にうまく対処できず、自分らしくふるまえない状況があると考えています。自分らしさを感じられるように、【からだ】の様子、【こころ】の動き、大切にしたい【かんがえ】を手がかりに、感情に意識を向け、自分に気づくことで自己理解を深め、自分なりの自分を感じる学習プログラムを開発しています。感情にはたらきかけることで、児童生徒の自己理解を促し、自尊感情の安定、集中力の向上、主体的な行動の活性化などの効果が期待できると考えています(図)。はたらきかけの手順やせりふを具体化し、短時間で実施できるいくつかのワーク(表)で構成した「あるがままの自分を感じる学習プログラム(試用)」を使って、研究協力校で取組を進めました。この実践を基に、学習プログラムの学校現場への取り入れ方や、先生への聞き取りから検証した児童生徒の変化、先生のはたらきかけへの影響について報告します。

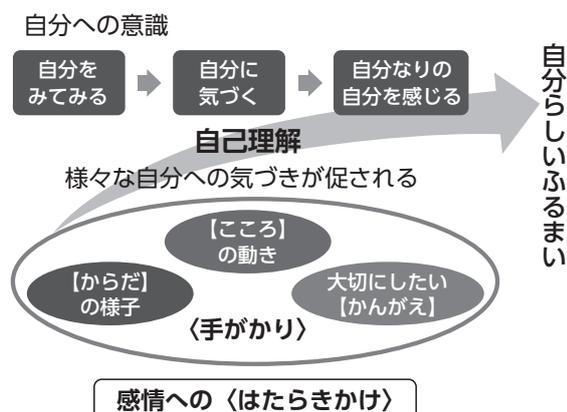


図 自分なりの自分を感じる仮説モデル

表 「あるがままの自分を感じる学習プログラム(試用)」ワーク一覧

手がかり	ワーク名	ワークの内容
からだ	鼻を通る空気を 感じてみよう	鼻を通る空気に注意を向け、鼻の下に置いた手に感じる空気の流れから自分の呼吸を感じる。
	胸やお腹の動きを みてみよう	呼吸するときの胸やお腹の動きから、自分の呼吸やからだの動きを感じる。
こころ	ふうせんに なってみよう	腕で大きなふうせんをつくり、呼吸と一緒に腕を上下や前後に動かし、自分の呼吸やからだの動きを感じる。
	こんな気持ちの時は どうなるかな	様々な感情を感じているとき、自分のからだがかような様子になるか考える。
かんがえ	考えない!	あることについて考えないようにしたり、そのままにしたりして、自分の心の変化を感じる。
	100回言ったら どうなる?	あることばをできるだけ早口で言ってみて、ことばの意味がどうなるかを感じる。
かんがえ	自分のことを みてみよう	なりたいたい自分や好きな動き、達成感が得られたこと、好きな言葉、人物について考え、自分のことをみる。

センター事業

中堅教諭等資質向上研修

(主管 教育研修部)

11月27日(水)に中堅教諭等資質向上研修「メンタルヘルス研修」「リーダーとして」「組織マネジメント研修」「閉講式」を行いました。その研修内容等をお知らせいたします。

メンタルヘルス研修

上越教育大学大学院の稲垣応顕教授を講師にお迎えし、講演「良好な関係性形成・維持とメンタルヘルス」を行いました。

受講者の声

- 生徒の心に寄り添っていくためには、教員側の心の在り方も大切だと実感しました。



リーダーとして

富山県教育委員会小中学校課教育力向上班長による講義「ミドルリーダーとしての自覚(役割)」を行いました。

受講者の声

- 自分たちの世代は人数が少ないため、これから担う責任の大きさを感じ、身が引き締まる思いになりました。
- 校内でのOJTに意識的に取り組んでいきたいと思いました。

組織マネジメント研修

SWOT分析を用いた演習を交えながら組織マネジメント研修を行いました。

受講者の声

- 学校教育目標や重点目標、目指す子供像を今一度確認した上で日々の教育活動に取り組みたいと思います。
- これまででは学級や学年を意識して取り組んできましたが、今後は「学校全体」に目を向けて教育活動を行っていききたいと思います。

閉講式

昨年度から実施となった中堅教諭等資質向上研修の閉講式を行いました。

受講者は2年間、「教育センター等における研修」に加え、「勤務校等における研修」(11年次に実施)を行い、中堅教員としての資質の向上を図り、実践的指導力や使命感を高めました。



小学校の先生方を対象に実施してきた「理科実験・観察訪問研修」は、今年度は17団体から延べ25テーマに申込がありました。「風で走る車を用いた教科書実験」「理科におけるプログラミング教材」等、学校や教育研究会等から要望を受けて新規に教材開発を行って実施した研修もあり、特に理科におけるプログラミング教材への関心が高まっていると感じました。

本年度は延べ405名の先生方が参加されました。どの研修においても先生方は積極的に取り組み、「研修で学んだことを活かして、効果的な授業改善をすることができた」という声も聞かれるようになりました。

今後も要望の多い研修項目（実験器具の基本的な取扱いや教科書と関連する観察・実験）の内容を充実させ、参加の先生方と共に有意義な研修を進めることができるよう取り組んでいきたいと思えます。



風で走る車を用いた教科書実験



理科におけるプログラミング教材



物質の3つのすがた



バーチャル火山噴火

不登校等の困難な状況にある児童生徒を支援するために、次のような「相談プログラム」「訪問プログラム」を実施しています。

○相談プログラム

<家族サポート>

体験交流活動 年4回 対象：小・中学生及び保護者

動物との触れ合いやクラフト制作等の活動を通して人と楽しく関わり、充実感、達成感を味わうことで、自己肯定感を育みます。

- ・動物ふれあい体験 6月
- ・家族キャンプ 8月
- ・手作り工房 10月
- ・おもしろ科学実験 12月



<家族サポート>

家族のためのセミナー 年2回

対象：小・中・高校生の保護者及び家族

臨床経験（学校臨床、教育臨床）豊富な専門家の講義や質疑応答により、家族の悩みを軽減したり、関わり方のヒントにしたりします。

- 8月 不登校の子どもとの向き合い方
- 11月 思春期・不登校の子どもへの関わり方

<アウトリーチ支援>

訪問指導員（地域・広域）による家庭訪問指導 対象：小・中学生及び保護者

家庭からの要請に応じて、不登校等の児童生徒宅を訪問します。訪問計画を作成し、児童生徒の実態に応じて相談や学習、活動等を行います。本人や家庭のニーズに応じて、次のような支援を実施します。

- <支援の内容>・家庭訪問指導（心理的、生活、キャリア、学習支援等）
・放課後登校、保護者相談、支援会議、学校や機関等との連携 等



○訪問プログラム

<適応指導教室サポート>

広域訪問指導員による適応指導教室訪問 対象：適応指導教室相談員、通級者、保護者

適応指導教室への活動支援を行います。児童生徒、保護者、指導員支援や支援会議等を実施します。

適応指導教室担当者研修会 年3回 対象：適応指導教室相談員等

専門家による講義・演習、事例検討、情報交換等を通して、児童生徒への援助・指導の充実を図ります。



デジタル・ディバイドへの不安

学力向上アドバイザー 吉江 友秋

若い頃から「教育に活用したい」と都合のよい理由を付けて、各種デジタル機器を購入してきた。

まず、根っからの悪筆を隠すため、ボーナスをはたいてワープロを購入。3年も使わないうちに、これからは、文章作成だけでなく、表計算やデータベースですよとパソコンへ。次は、これからWindowsの時代ですと。そして、Windowsのバージョンがアップするごとに購買意欲を刺激され続けてきた。さらには、生徒がスマホを使い始め、ネットトラブルが学校に持ち込まれると、「教員も知らなくては」との理由で即座に購入。

よくよく考えれば、単に便利そうな新しいデジタル機器を持つことにあこがれ続けてきたのかもしれない。だが、もはやネットに繋がったスマホやパソコンは、生活必需品となった。

朝、天気が怪しいときは、スマホで雨雲確認。友人や家族からの連絡はSNS、必要があればビデオ通話で顔を見てやりとり。ネット通販で欲しいものをカートに入れば、翌日届く。電車の時刻表もスマホアプリで確認。車で遠出し、ランチはどこでとスマホでググる。ネットでのホテル予約は、特典が付いたり割引があったりする。

ただし、パソコンやスマホを買い換えるごとに、セットアップや操作に手間取るようになった。また、スマホの文字は加齢とともに読みづらくなり、小さな画面での文字入力に一苦労する。思わず音声入力に頼り、

「高岡市 おいしいお蕎麦屋さん」などと傍目を気にせずスマホに語りかける自分がある。

去年は、張り切ってオリンピックのチケット抽選にチャレンジ。元気なうちに国内で観戦できるオリンピックとしては、最後になるであろう東京オリンピック2020。申し込み完了までに4時間もの時間を費やすこととなった。アクセスも集中し、パソコンでの操作が複雑で、途中で何度も挫折しそうになる。ID登録やら電話番号認証、しかも、数撃ちや当たると28もの競技セッションを申し込んだため、チケットの種類、座席の選択と、やたらと面倒な手順や操作が多かった。

小学校では、いよいよプログラミング教育が始まる。国は、「1人1台」の状況でパソコンやタブレット型端末を使える環境を、令和5（2023）年度までに整備するための政策を経済対策に盛り込んだ。学習へのICT（情報通信技術）の活用が、世界に比べて遅れていることへの改善や地域間格差の是正を狙うという。

地域間格差の是正も大切だが、高齢者の仲間入りをした我が身としては、高齢者のデジタル・ディバイド（情報格差）への不安も取り除いてほしいと願っている。これからの時代は、スマホで終わらない。今後も、様々な新しい携帯端末やデジタル機器が出てくるだろう。それを使いこなせるかどうか、生活の質の格差につながるのではという不安を、高齢者の宿命として受け止めなければならないのだろうか。誰をも置いてけぼりにしない、機器の登場とやさしい社会を期待したい。



「井波彫刻」に思う

教育研修部長 櫻野 克也

真宗大谷派井波別院瑞泉寺は明徳元年（1390）に本願寺五代の綽如上人（しゃくにょしょうにん）によって建立されたが、幾度かの大火に見舞われた。この度重なる災いは、この地に井波彫刻の技を根付かせ、伝統を育てていくきっかけとなった。宝暦の大火で焼失した瑞泉寺の再建にあたり、御用彫刻師の前川三四郎が京都本願寺より派遣され、井波の宮大工・北村七左衛門（番匠屋九代）ら四人が師事し彫刻の技法を本格的に教わったことが井波彫刻の始まりと言われている。寛政4年（1792）、七左衛門が瑞泉寺勅使門に彫刻した「獅子の子落とし」は日本彫刻史上の傑作とされている。その後、井波彫刻は発展を遂げ、神社仏閣彫刻だけでなく、衝立などの調度品、獅子頭や天神様などの工芸品に派生した。明治時代に入ると、住宅用の井波彫刻欄間の形態が整えられ、今日まで受け継がれている。

先日、「木彫刻のまち井波」の工房を訪れた。扉を開けると木の香りが漂い、ノミを打つ小気味のいい槌音が響いていた。職人たちは200本以上の彫刻刀、ノ

ミを巧みに使い分け、彫る部分の図柄に合わせてノミを選び木肌に刃を滑らせ、木塊に繊細に魂を吹き込んでいた。かたわらでは刃の形や幅の異なる何種類もの道具が出番を待っていた。彫刻材には適度な堅さと粘りがあって細工がし易いクスノキ（楠、樟）を使用すること、花鳥・風景等様々な図柄を立体的に彫り上げ、表と裏図柄を変えて彫りを施すこと、枠から外にはみ出ているように見せる「枠からこぼす」という彫りも両面で出来ることなどを教わった。

昨今は日本間のない住宅も増え、需要も減少しているようであるが、奥行きと立体感のある優れた井波彫刻の技をその時代、その時代に求められるかたちを創りだすように工夫し、後世に伝えてほしいと思っている。



井波別院瑞泉寺

Science
Cafe

砂をよく見てみると・・・

科学情報部 研究主事 尾島 賢治

砂というと、身近なところで学校のグラウンドの砂を思い浮かべることが多いと思いますが、じっくりと観察したことはあるでしょうか。

グラウンドの砂を双眼実体顕微鏡やルーペで観察すると、石を細かく砕いたような粒（写真1）がよく見られます。これは、火山に由来する岩石が、長い年月をかけて細かく砕かれ、堆積したものが多くからです。山や川に大昔に堆積した砂をグラウンド用として購入している学校がほとんどです。

ところが、一見砂のように見えても、場所が違えば堆積しているものも違います。高岡のある山の砂（写真2）を観察すると、岩石が砕かれたものとは思えないもの（写真3）が見られます。これらは有孔虫という海に住む生き物の殻で、大昔に生きていた有孔虫の殻が、その死後、堆積して地層をつくったのです。

この有孔虫とは、何億年も前から現在まで、海に生



写真1 グラウンドの砂



写真2 高岡の山の砂

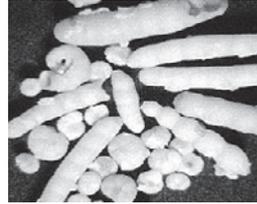


写真3 有孔虫

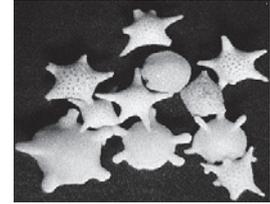


写真4 星の砂

息している単細胞の原生動物です。大きさは小さいものでは0.1mmのものから、大きいものでは数cmのものまで様々ですが、ほとんどは1mmに満たないものです。生活場所の違いで浮遊性有孔虫と底生有孔虫がありますが、どちらもプランクトン等を捕食しています。また、からだは炭酸カルシウム（貝や卵の殻と同じ成分）できている殻で覆われています。この殻が有孔虫の死後堆積します。

有名なものは、沖縄やその近隣で「星の砂」(写真4)等という名称で土産品として売られています。沖縄等の砂浜では、星形の有孔虫の殻がたくさんあり、それらを集めたものが小瓶に入っています。場所が違うので、高岡の砂とは違った姿の有孔虫が見られます。

実はこの有孔虫の殻、堆積した当時の年代や環境について調べる手がかりの一つとなります。身近なところに太古の痕跡があるなんて、不思議ですね。

教育相談

連載

心の底にある“好き”

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

早いもので、もう今年目標を忘れてしまった人もいる頃でしょうか。学校に行っていない小6は、中学校では「新しい自分」になって楽しくやりたいと願う時期かもしれません。どんなキャラで勝負しようかと考えている子もいます。

2週に一度、総合教育センターに母親とやってくる女子、Aさんもその一人。相手の反応が気になり、思っていることをストレートに表現するのが苦手な彼女は、小4の時、ぐいぐい接してくる男子がたまらなく嫌になったそうです。お母さんは、「家でも気を使っているんじゃないか」と度々言われます。

センターの親子並行面談は、親と子が別々の部屋でそれぞれの担当者と話します。面談の初めと終わりは、4人が同じ部屋で話します。私は、Aさんの母親担当ですが、先日、最初の5分でAさんからふいに質問されました。

「舘野さんは、思ったことをママにいろいろ言うけれど、ママはうれしそうにしている。どうしてママは舘



野さんを嫌いにならないんですか」。母親への私の態度も、ぐいぐいに見えるのでしょうか。飾ってもこの子には見透かされるから正直に言うしかないと思い、「あなたとお母さんのことを好きだからだよ」と伝えました。

目を丸くした彼女に、「心の底にある“好き”という思いが、2人に伝わっているだろうと安心しているから、何でも言えちゃうんだよ」と付け加えました。

Aさんと彼女の担当者が別の部屋に入った途端、興奮して叫んだそうです。「大人でも“好き”って言うんだ〜」。あまりに素直な反応にうれしくなりました。気持ちを言葉で伝え合う意味を少しは感じてくれたでしょうか。

Aさんは最近、「ぐいぐい接してくる」態度にも2種類あると思えるようになっていました。「かまって、かまって」と自分の気持ちを押し付けてくる場合と、相手を励ますのに声をかける場合だそうです。彼女は、中学生になったら、「少し騒がし目な、周りを盛り上げるキャラを出したい」と考えているようです。